月刊

JMITU

ディスカ

新型コロナ対応版

1月号

日本金属製造情報通信労働組合大田地域支部
セガ　グループ分会　2022年発行

No,445

２０２２年
明けましておめでとうございます。

昨年はコロナの影響もあり、ディスカの社前での配布もできませんでした。今年に入っても、コロナが落ち着くまでは社前配布は行えませんが引き続きホームページで掲載していきますのでよろしくお願いします。

私達労働組合は来月に、春闘要求を会社に行います。

その中で、残業削減を含めた一日の労働時間を「本格的な労働時間短縮闘争に挑戦しよう」と提起しました。若者を中心に「働き過ぎを何とかして」「自由な時間が欲しい」という切実な声が上がっていること、そして日本の労働組合がその声に十分に応えきれていない現状があるからです。

健康で文化的な生活とは

憲法２５条には「すべての国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」とあります。では、「健康で文化的な生活」とはどんな生活のことでしょうか。物質的な豊かさ＝貧困がないこと、それだけでは不十分です。絶対に欠かせないもの、それは自由な時間です。自分や家族・恋人との時間、友人たちとの交友の時間、スポーツや音楽・趣味などができる時間が必要です。物質的な豊かさがあり、さらに自由な時間が十分にあって初めて「健康で文化的な生活」といえるのであり、「自由な時間」は憲法で保証された基本的人権です。ところが、日本の労働者の多くは「健康で文化的」とは程遠い生活を強いられています。その原因は労働時間が長いことです。

毎年要求していますが「１日実働７時間、週５日制、３５時間労働とすること。」は引き続き行っていきます。

ツライ暮らせないはあなたのせいじゃない

１９９７年を１００として
２０２０年は

韓国	１５７．３
スウェーデン	１４１．５
アメリカ	１２２．７
イタリア	１１７．３
日本	８８．９

日本だけ賃金が下がっている。

どんどん増えた
非正規労働者

２００９年１７２７万人
３１．６％

１０年

２０１９年２１６５万人
３８．３％

１０年で約４００万人増加その反対に、大企業の内部留保が２０２０年には、４６６兆円に伸びている。

賃金の格差

男性正規社員を１００として

男性非正規	６２．３
女性非正規	５０．８

最低賃金で働く人が

２００９年	７．５％
２０２０年	１４．２％

１０年で倍増

日本の賃金の異常な低さが社会的な認識となり、大幅な賃金底上げを求める世論がひろがっています。

今年の春闘に向けて、政府が経済界に対して３％を超える賃上げへの協力を呼びかけ、経団連も賃上げに前向きな方針を打ち出すことになりました。

これによりますと、コロナ禍が長期化し業績のばらつきが拡大する中、各社の実情に適した賃金決定を行うことが重要だとしたうえで、社会的な期待なども考慮に入れた検討が望まれるとしています。

日本の人口が減っていく中で消費を拡大させるには、１人あたりの所得を増やすことが大事で、特に物価が上昇する時には、賃金をできるだけ上げて、値段が上がっても買える余裕を作ることが巡り巡って企業にプラスになると思います。

セガの場合は４月より新たな新人事制度が始まり、今までの年齢給というものはなくなります。以前にも増して成果主義賃金の色が強くなります。

資格の上限に達した人は、昇格しない限り賃上げはありません。それどころか下がるかもしれないという制度です。

制度がポイント制になったのでそのポイントの累計でステージが変わり、給料が改定される為、今までのように毎年、賃上げされるということがなくなります。

過去には「セガサミックス」で全社員に３％の賃上げなどを行いましたが、一度のみで継続されませんでした。

コロナ禍で、物価が上昇する中、今年こそは行うべきではないでしょうか。

社員と役員の「年収格差」が大きいトップ５００社

東洋経済オンラインで、日本企業の役員報酬は、一般従業員の年収と比較すると、どれほどの違いがあるのかという記事がありました。各上場会社の有価証券報告書記載の役員報酬総額と役員数を用いて、役員１人当たりの平均報酬額を算出。それらを当該企業の従業員の平均年収と比較して、「年収格差ランキング」最新版３月期会社では２０２０年度（２０２１年３月期）が発表されました。

ちなみにセガサミーＨＤは１０２位でした。

平均役員報酬９０６６万円
平均給料７４４万円
１２．１９倍

役員報酬もすごいですが、平均給料が７４４万円というのにも驚かされます。自分の賃金からは程遠い、役員だけでなく、社員間でも格差は広がっているようです。

掌編小説

恩　人

仙洞田一彦

社員食堂に残っていたのは、梨田と梨田の同僚の二人だけだった。感染防止で席が減らされているのとリモートワークで食堂利用者は少なかった。閑散とした食堂に冬の傾いた陽が、奥まで差していた。

「峰下って奴いただろう」

同僚が言った。梨田は峰下という名前を聞いたとき、ザワッと胸が騒いだ。

「ああ、亡くなったと聞いている」

梨田は同僚の言葉に返事した。梨田と同僚はともに六十歳を過ぎていた。そしてその前は二人とも管理職だった。今は二人とも嘱託で働いている。ほぼ同じ職場を歩いてきたので、峰下のことは知っていた。

「それがな、生きていたらしい」

「ほう」

梨田は胸騒ぎを抑えて言った。

「峰下が辞めて、どのくらい経つ」

同僚が聞いた。

「二十年くらいじゃないかな」

梨田は空を見ながら答えた。峰下は十歳くらい下だから、今生きているとしたら五十をいくつか過ぎているだろう。亡くなったという噂は嘘だったのか。

「街で見かけた奴がいて、俺に教えてくれた」

同僚が言った。

「何時」

同僚にはできるだけ平静を保ち、関心がないふりをして聞いた。

「昨日のことらしい」

同僚も関心なさそうに答えた。

「田舎に帰って、農業をやっているって聞いたけどな」

梨田は古い記憶を頼りながら言った。梨田の言葉に同僚がうなずいた。峰下は身長もそこそこあり、ごつい体をしていた。しゃべり方と言うか、話し方が尊大で、相手が上司だろうと変わらなかった。

「東京に用事でもあったのかな」

梨田は同僚に聞いた。

「さあ」

同僚が言った。話はそこまでで、二人は食堂から職場に戻った。

梨田は自分の席に腰を下ろしたものの、峰下のことが頭を離れなかった。

もう二十年も経っているから、あらためて会社に用事もないだろう。辞めてすぐなら、何かの手続きや何やかやで会社に来ることもある。それとも農業がうまく行かなくて、また東京で働くつもりなのだろうかなどと考えた。

何年前に辞めたかははっきりしないが、辞める前に峰下と交わした会話は覚えている。

「俺、会社辞めるから」

峰下は梨田の机の前に立って言った。

「え」

梨田は前に立つ峰下の顔を見て言った。いきなりこういうことを言いそうな男だったから、聞かされたときは「来

たか」という感じだった。
「課長の人事評価に不満です。だから辞める」
　峰下が言った。
「いや、峰下君の実力からすると、もっとやれるはずだと思ってね。君の将来を思って、あえて厳しい点をつけたんだ」
「理由なんて、どうでもいい。平均点より低く査定したという結果です。辛い思いをさせた側は忘れても、辛い思いをさせられた側は決して忘れません。そのことを伝えておきます。俺は執念深い性質なんで、退職したって、この恨み忘れません」
「辞めさせるための評価ではないんだ。いっそう奮起して貰おうと期待してだね」
「口では何とでも言えますよね。そちらも、そちらの理由があって点数をつけたんでしょう。でもつけられた俺が点数をどう解釈するかは、俺の勝手でしょう」
　峰下が答えた。言い方に興奮したところはなかった。目はじっと梨田を見ている。こういう場面も以前経験しないでもなかったが、大方の部下が言って来る時は激しく興奮している。言うだけ言うとおさまってしまう。峰下にそういうところはなかった。その冷静さが、何とも言えない怖さを感じさせた。興奮して喚き散らすのを前にすると、どうせ退職してしまうのだからと梨田の方が腹が座ってしまう。だが峰下の目は梨田を見据えていた。
　しばらくして峰下が田舎に引っ込んだと聞いたときは、心なしかホッとした。そして、誰からどう伝わったのか、どうしてそういう話になったのか分からなかったが「峰下が亡くなった」と伝わってきた。
　それを聞いた後は、峰下との最後の会話も、ほとんど思い出さなくなった。ふと記憶に登ることもあるが、ちょっと苦さを感じるくらいで、峰下とのことは終わったと思ってホッとした。
「梨田さん、ご面会です。峰下さんという方」
　受付の若い女性が、梨田の席の方を向いて、声を張り上げた。
　入口の方を見ると、男がすでに事務所に入り、梨田の方に向かって歩いてきていた。
「あ」
　と若い女性は制止するように声を上げたが、峰下は無視をした。若い受付の女性は峰下を知らないだろう。梨田は女性に向かって、《ＯＫ》のつもりで、大きく手を上げて振った。
　男は昔の雰囲気は持っていたものの、痩せていた。痩せ方が激しく、鞘から抜かれてしまったナイフのような感じだった。頭髪も白くなっていた。だが間違いなく峰下だった。
「こんにちは、梨田さん」
　峰下は辞めたときと同じように、梨田の机の前に立った。
　最近は、誰でもいいと、他人を巻き添えにする事件が続いている。相手は選ばないがとにかく「恨みを晴らす」というような犯罪だ。当時より痩せているとはいえ、破れか

ぶれに力を出されたら、太刀打ちできないかも知れない。
「ああ、峰下さんですね。お久しぶり、お元気でしたか」
梨田は笑顔を浮かべながらも、何をするか分からない峰下の動きからは目を放さなかった。
「へへへ、お元気と言いたいんですが、大病をやりましてね。死に損ないました」
頬骨が出ている。しわは笑い顔の形になったものの、目が笑っていないのは昔のままだ。峰下は自分の近い死を予感して、恨みを晴らしに来たのだ。そう梨田は思った。
「周りは死んだと思ったかも知れませんね。動けない、意識ない同然の入院でしたから。それでも三、四年、何とか生き延びました。こうして東京にも来られた」
「それは良かった」
梨田は言った。そう言わざるを得なかった。変に刺激したくなかった。
「いやね、こうして歩くことができるうちに、お礼を言わなくちゃと思って、伺ったんです」
峰下が、息を切らしながら言った。峰下の言葉を聞き、梨田は《お礼？》《お礼参りだろう》と心のうちでつぶやいた。声には、
「そう」
とだけ出した。
「死にそうになった時、一度や二度じゃないですけどね。その度に、梨田さん、あなたの顔が浮かんだんですよ」
深い皺だらけの、しかし無表情な峰下の次の言葉を待った。
「恨みを晴らすまでは死ねない、って思ったんですよ。恨みを抱えたまま死ぬのは辛いですよね。すっきり死にたい」
峰下の言葉に、梨田は体をこわばらせた。ナイフか何かを隠し持っているのか。しかし、身体が動かなかった。もしナイフを突き出されたら、と思い机の下の両足を、そっと踏ん張った。いざとなったら足を蹴って、後ろでも横でも体をかわそうと思った。峰下は続けた。
「ハッ、ハハハ。最後は体力ではなく、気力勝負ですね。チクショー、恨みを晴らすまでは死ねない、と気を張ると、呼吸が回復するんですよ。血が体を巡り始めるんですよ。だから梨田さん、俺より先に死なないでくださいね。先に死なれると、俺ががんばれないからね。そんなわけで今日は、お礼かたがた、お願いに来ました。よろしくお付き合いのほどを」
峰下は言うと、頭を下げると踵を返して、事務所を出ていった。
「あ」
梨田は、ようやくそれだけ発すると、しばらくの間、椅子に縛り付けられたままだった。